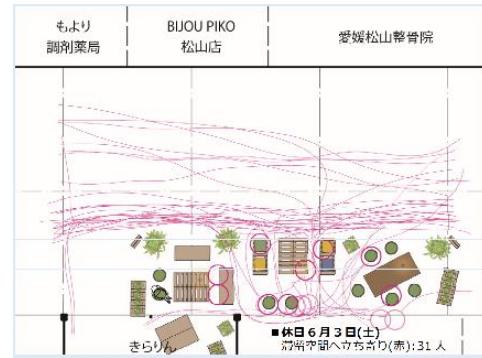


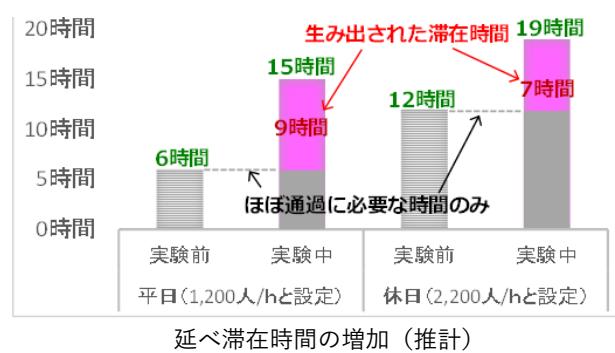
効果検証

滞在時間が2倍に！効果を値で証明

実験中の歩行者動線のトレース調査を行ったところ、滞留空間は通行に支障がなく、また、歩行者の誘因機能を果たすことが確認できた。
滞在時間の調査では、実験前後で平日は2.5倍、休日は1.6倍と、平均で2倍以上滞在時間が増加していることが分かった。この増加に伴い、新たに生み出された滞在時間は平日は9時間、休日は7時間（1日当たり）である。
利用者アンケートでは、9割が肯定的な意見であり、周辺店舗ヒアリングでも4割の店舗がプロトタイプの実験に前向きな意向を示した。



歩行者動線のトレース調査



展開



銀天街商店街での社会実験の半年後、H29年12月から商店街組合によって滞留空間が常設された。当初は、クリスマスツリーが飾られた。



H30年3月に空き店舗のシャッターが付け替えられ、ブラックシートの貼付は終了した。代わりに、木の衝立を設置している。



松山市で庭師として働く小野豊さんは、日頃からまちなかに緑地が少ないと感じており、植栽管理の無償協力を申し出てくださいました。「自分にとっての社会実験」として、植栽等は無償で提供していただき、春は苺、梅雨はアジサイというように季節毎に植栽を入れ替えている。作業中は「何をしているのか?」「これは何の木か?」と声をかけられることも多いと言う。ゆくゆくは、植栽のワークショップなども開催し、緑を使ってまちに賑わいを生み出すことを目標にされている。

松山市役所 都市整備部 都市デザイン課
Tel 089-948-6466 Fax 089-934-1807
E-mail design@city.matsuyama.ehime.jp

銀天街まちなか空間活用実験



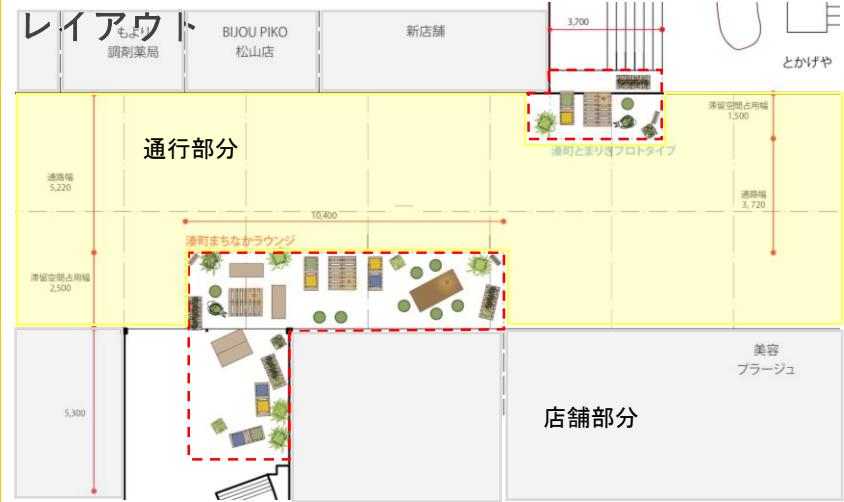
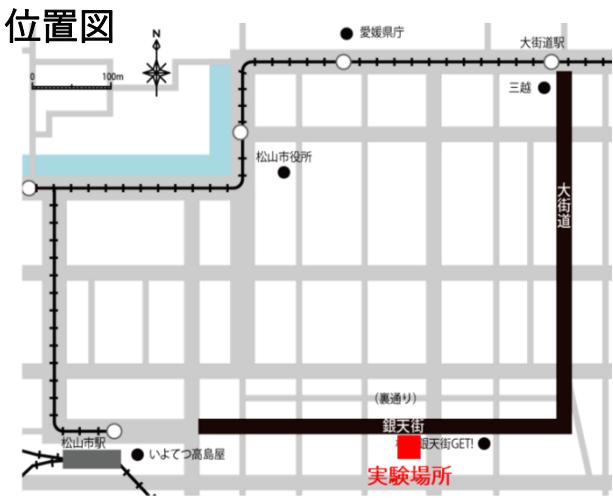
公共空間の新しい使い方

いつもの商店街が、何か違う。
道路にベンチやテーブル、プランターが置いてある。
新しいお店・・・?ではないみたい。
休憩したり、本を読んだり、おしゃべりしたり。
看板には「いつでも誰でもご自由に」の文字。

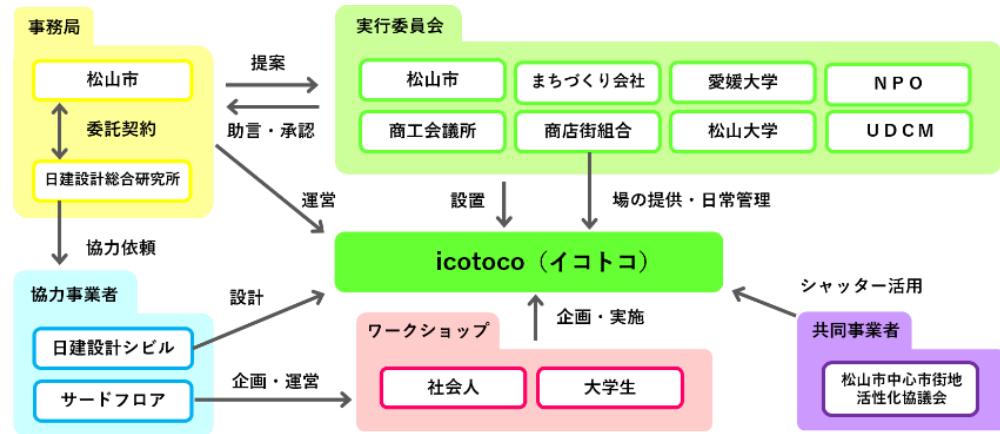
ここは、カフェでもなければ広場でもありません。
道路上の憩いの場「icotoco (イコトコ)」です。

Date

期間	平成29年5月20日(土)～6月18日(日)
場所	松山市湊町四丁目(銀天街商店街内きらりん及びPLUS TOKAGEYA付近)
内容	誰でも自由に利用できる滞留スペースの整備
設置物	ベンチ、テーブル、イス、植物のプランター、本棚、意見交換ブース
主体	銀天街まちなか空間活用実験実行委員会(事務局:松山市)



実施体制



背景 まちから人が減っていく



城下町として栄えた松山市の中心市街地。時代の移り変わりとともに、まちの姿は変化していった。H20年、若者が集まるファッションビル「ラフォーレ原宿・松山」が建物の耐震性の問題で閉館。その1か月後には、隣接する町に郊外型大規模商業施設が出店した。インターネットの普及によるネット市場の拡大もあり、歩行者通行量はこの10年で3割減少。関係者は危機感を募らせていた。

平日夕方の銀天街



賑わいを生み出すには、滞留時間の増加やエリアの回遊性向上が重要とされる。しかし、商店街には滞留者の受け皿となる空間が乏しかったことから、大街道商店街の道路空間に滞留スペースを設ける社会実験を実施した。異なるテーマ（芝生/本）で9日間の実験を2回行った。単にイス・テーブルを並べるのではなく、植栽等で通行部分と滞留部分を分けるなど、居心地のいい空間となるよう心掛けた。

大街道商店街での社会実験



社会実験終了後、滞留空間の運営者を募集したところ、大街道商店街の老舗果物屋「だいいちフルーツ」の渡部勝平店長が手を挙げた。社会実験で賑わう様子を見て、滞留空間の必要性を感じたと言う。商店街振興組合と協力して、平成28年12月から「SWALOT（スワロット）」という名称で滞留空間が常設化された。警察署や道路管理者の理解により、道路使用・占用許可は1年単位で下りている。

滞留空間を運営する渡部店長



毎日、だいいちフルーツのスタッフが開店・閉店のタイミングで什器を出し入れし、汚れた場合は清掃する。南隣が商店街振興組合の事務所なので、什器の収納場所として使わせてもらっている。イス・テーブルは可動式で、人数に合わせて自由に動かすことができる。ほどよい位置に植栽も配置。

大街道に常設された滞留空間

過程 連携の輪は広く深く



社会実験の主体となる実行委員会は、多様な主体が参画し、それぞれの視点を活かして協議した。滞留空間はハード面に目が行きがちだが、ソフト面の充実によって、はじめて人に愛される空間となる。そこで、実行委員会で全て決めるのではなく、市民ワークショップを開催してデザインなどの検討を行うことにした。

実行委員会の協議風景



市民のニーズにマッチした滞留空間をつくるため、また、滞留空間への愛着を高めるため、市民がアイデアを検討・提案し、実行するワークショップを実施した。地元で活躍するクリエイターに運営を依頼し、デザイナーや飲食店・雑貨屋オーナー、設計事務所の実務者がファシリテーターを務めた。参加者は、雑誌編集者や銀行員、行政職員などの社会人と学生ら30人が集まった。

市民WS（全体）



滞留空間をつくる上で、デザインの基準は難しい。オシャレすぎると近寄り難く、質を下げれば居心地も悪くなる。公共空間という特性上、多くの人に受け入れられるデザインでなければならず、安全面にも配慮が必要である。デザイン班では滞留空間のネーミングやロゴを検討した。「憩うところ」という場所の意味から「icotoco（イコトコ）」という愛称を考案。そのまま採用された。

市民WS（デザイン班）



社会実験前には、空き店舗のシャッターを活用した周知を行った。空き店舗のオーナーに許可をとり、4m×7mの巨大なブラックシートを貼り付け、社会実験をPRした。このような取組みは初めてで、道行く人は二度見し、振り返って眺めていた。オシャレなデザインも好評で、このブラックシートは、社会実験中も滞留空間の「背景」として活用した。

シャッターを活用した周知

実施 道と店をまたぐ滞留空間



銀天街商店街での社会実験

社会実験開始直後は、不思議そうに眺める人も多かったが、誰かが座っている姿を見て、徐々に立ち寄り人が増えていった。実験場所は、商店街が運営する無料休憩所と隣の空き店舗前の道路空間を活用した「ラウンジタイプ」とセットバック部分と道路空間を活用した小規模な「プロトタイプ」の2か所である。無料休憩所とセットバック部分の店舗スタッフに、什器の出し入れや掃除に協力してもらった。



シャッターの意見交換ボード

空き店舗のシャッターに貼付したブラックシートには、意見交換ボードを設置した。「まちなかでしたいこと」をカードに書いて貼りつけるものだが、予想以上に反響が大きかった。特に高校生・大学生に人気で、「デート」や「たこやきパーティー」など続々と意見が貼られ、それを眺める人の姿も多かった。週に一度はカードを回収したが、枠からはみ出るほど貼付される週もあった。



シャッターの本棚

シャッターを活用して、本棚も設置した。この本棚は「交換型」で、1冊持ってきたら1冊持ち帰ることができる。もちろん、滞留空間で自由に読める。実験初期にはこちらで本を用意したが、その後は利用者に運用を任せた。実験開始直後は、大量に持ち帰られることもあったが、次第に落ち着き、利用者によって本が入れ替わるようになった。



セットバックと道を一体活用

他所での展開を視野に、セットバック部分と道路空間を一体的に活用したプロトタイプも設置した。小規模ながらも、植栽を活用してちょっとした休憩に利用できるよう整えた。大街道は道路幅員15mだが、銀天街は7.5m程度しかない。緊急通行車両スペースの3mを確保し、通行の邪魔にならないように、民地部分も一体的に活用したことがこの社会実験の要である。